

九州天皇家論 章 大八州

九州天(あま)王朝誕生

伊豫之二名島

この島は四国と比定されている。だが、普通に考えて四国は大きすぎる。四国は確かに島ではあるが、それは現代人の私たちが持つ地理認識である。伊邪那岐命は「淡路島の端の狭い島」に弥生国家を作り、次に「伊豫之二名島」を作った。恐らく、この「伊豫二名島」は「淡路島」に近い。当時は小船と徒歩と矛による國作りである。一挙に遠くに行くことはできない。

「伊豫二名島」は「身一つにして面四つ有り。面毎に名有り。」と島の形状、様子を述べている。この説明から島は四角形で、それぞれの面には弥生国家が存在したと思われる。古事記が記す「國名」と「別名」は次の如くである。

伊豫國……………愛比売(えひめ)
讃岐國……………飯依比古(いひよりひこ)
粟國……………大宜都比売(おほげつひめ)
土佐國……………建依別(たけよりわけ)

古事記が記述する別名からこれらの弥生国家の統治者には女王と男王が居たことが分かる。「伊豫國」と「粟國」の統治者は女性であった。「讃岐國」は男性であった。「土佐國」の統治者は男か女か分からない。ただ「土佐國」の「建依別」という別名から考えて「建」という男王の分国であったことも分かる。古代にすでに「建」という名前の男王の国家が存在していたのである。

「伊豫國」「讃岐國」「粟國」「土佐國」といっても、この古代国家は弥生国家である。その弥生国家とは小さな弥生集落である。現在の「愛媛県」や「香川県」「徳島県」「高知県」を云うのではない。伊邪那岐命、伊邪那美命の夫婦建国物語は小規模の弥生集落を建国した物語である。だが、「建国した」とは云っても、初手から鍬や鋤で田畑を耕したという意味ではない。建国は「矛」によって成し遂げられた。つまり、伊邪那岐命、伊邪那美命はすでにできあがっていた弥生集落を武力で自分の支配下に置いたのである。建国物語とは征服物語と云ってよい。

「伊豫之二名島」は四角形の嶋であった。その嶋の四つ面にそれぞれ弥生集落が存在した。それらの弥生集落にはそれぞれ女王、男王がいて、それぞれに分立統治していた。伊邪那岐命、伊邪那美命はこれらバラバラに存在した弥生集落を統合し支配したのである。「國産み」の実体とは統合支配のことである。

「建依別」の「建」は人名

「伊豫二名島」で征服した「土佐國」には「建依別」というもう一つの國名があった。この國名は伊邪那岐命がつけた名前ではない。すでに古くからこの國は「建の分国」と呼ばれていたのである。

「建」とは何か。「建」に関してよく知られている説話は「倭健」の物語である。景行天皇には二人の男の子がいた。弟が小碓命である。景行天皇は小碓命に「西の方に熊襲建二人有り。是れ伏はず禮なき人等なり。故、其の人等を取れ」と命令する。「建」とは熊襲の王の名前である。小碓命がこの熊襲王の兄弟を殺害した時、弟の熊襲建が云う。

信に然ならむ。西の方に吾二人を除きて、建く強き人無し。然るに大倭國に、吾二人に益りて建き男は坐しけり。是を以ちて吾御名を献らむ。今より後は、倭健御子と称ふべし。（古事記中巻小碓命の西征）

こうして小碓命は熊襲王の名前「建」を授けられて、以後、「倭健」と名乗ったというものである。この説話にあるように「建」とは人名（王名）である。「建依別」とは「建の國から分かれた國」という意味である。当時、「建」が統治する強大な国家が存在していた。その分國が「伊豫二名嶋」にあった。その分國が「建依別」と呼ばれていた。伊邪那岐命はこの「建の分國」を征服して自分の支配下に治め、その弥生国家を「土佐國」と名付けた。これが「土佐國」の國生みである。故に「建依別」という古いもう一つの名前があったと記録していたのである。

ところが、「伊豫國」「讃岐國」「粟國」は「土佐國」とは少し異なる。これらの三つの國は分国ではない。別名として記載されているのは王の名前である。これらの王は伊邪那岐命と同じ一族だったのであろう。従ってこれらの國に対しては「矛」によって征服したのではなく、主従関係を結んだのである。

伊邪那岐命、伊邪那美命は「伊豫二名嶋」に存在していた四つの弥生国家（弥生集落）を自分の支配下に治めた。これが「伊豫二名嶋」國生みの物語である。

弥生国家像

「國生み」と云われる当時の弥生国家とはどのような実体だったのであろうか。日本より先に弥生文明を築いた中国の西安陝西歴史博物館には私たちが云う「弥生式土器」が展示されている。同時にその土器を使っていた集落のミニチュア模型が展示されている。これが弥生国家である。

伊邪那岐・伊邪那美が「國生み」した弥生国家もこのような姿をしていたのであろう。二人が「國生み」した嶋は小さな嶋であった。その大きさから考えると伊邪那岐・伊邪那の弥生国家の規模はこの模型よりもっともっと小規模だったのではないだろうか。しかし、小さいとはいえ伊邪那岐・伊邪那美はこれらの弥生集落を征服統合することによって、「天（あま）王朝」というべき統一国家を創建することになった。「國生み」とは超古代の統一国家建国物語といえる。

陝西歴史博物館



伊豫二名嶋は二つの名前をもつ女王の嶋

「伊豫」とは女王の名前

「伊豫二名嶋」の特定はなかなか困難な作業である。が、先に進みましょう。「伊豫二名嶋」は古代「淡路島」の次に作った島である。この嶋の特徴はその名前にある。ただ「伊豫嶋」といえばすむところを、「二名」とわざわざ付け加えて名前としている。この「二名」の意味は古今明らかにされていない。ある人は地名と考え、また、ある人は「二並(ふたならび)」の意味で二組の男女が並んでいる國であると解している。

しかし、これらの解釈は「二名」という漢字表記が持つ意味から外れる。「二名」とは文字通り、「二つの名前」の意味である。この嶋には二つの名前があった。むろん、その名前の一つは「伊豫」である。「伊豫」とは「松本伊代」という歌手がいたように、今でも女性の名前である。この嶋は「伊豫」という女王が支配していた嶋だった。しかし、この女王にはもう一つ名前があった。故に「二名嶋」と呼ばれたのである。

もう一つの女王の名前は「豊」

「伊豫二名嶋」という島は「伊豫」という名前で呼ばれた女王が支配した嶋だった。もう一つの名前は不明である。では、もう一つの名前は一体いかなる名前なのか。私たちはその名前をどこに見つけることができるのだろうか。その名前は「筑紫嶋」に造られた四つの弥生国家の一つの國の名前の中にある。

私たちは「伊豫二名嶋」のもう一つの名前を知るためには「筑紫嶋」で國生みされた古代國の解明を必要とする。「筑紫嶋」の弥生国家の解明が出来なければ「伊豫二名嶋」の解明もできない。全ては相関関係にある。古代世界は全て繋がっている。「筑紫嶋」の特定は次章で行なうが、ここでは「二名」の解明に必要な事柄を取り上げて見よう。

伊邪那岐命、伊邪那美命は「筑紫嶋」にも四つの弥生国家を造った。その國は「筑紫國」「豊國」「肥國」「熊曾國」である。もちろん「筑紫嶋」と「筑紫國」は異なる概念で、伊邪那岐命、伊邪那美命は嶋を造ったのではなく「筑紫嶋」に存在していた四つの弥生国家を支配下に置いたのである。これらの國にも別名があった。その別名の中に「伊豫」のもう一つの名前がある。

故、筑紫國は白日別と謂い、豊國は豊日別と謂い、肥國は建日向日豊久士比泥別と謂い、熊曾國は建日別と謂う。
(古事記上巻)

別名はそれぞれ次のようになるが、表記には特徴がある。

筑紫國……白日別

豊國……豊日別

肥國……建日向日豊久士比泥別

熊曾國……建日別

筑紫嶋の四つの國の別名には全て「別」が付いている。「別」とは分国の意味である。もう一つの特徴は「日」である。「日」とはいかなる意味か。「日」の意味は「日向」とセットで考えられなければならない。

「日向」……文字通り「日が向かう」という意味である。日が向かうのは西である。故に「日向」とは西を表す方角の専門用語である。

「日」……「日」とは太陽を意味するがここでは太陽そのものではなく太陽が出る東を意味する。「日」もまた方角を表す専門用語である。

「日」とは東である。そうすると、「白日別」とは「白という國の東の分国」という意味となる。古代「筑紫嶋」に存在したこれらの四つの國の別名は本国が存在したことを前提にして付けられた国名である。「筑紫嶋」の西にこれらの古代国家の本国が存在していたのである。

では、「豊國」とは何か。「豊國」とは「豊かな國」と現代的に解釈してはならない。「豊」はそのまま「とよ」と訓むべきである。つまり、「建」と同じく「豊」とは人名である。従って「豊國」とは「豊が支配する國」という意味である。「豊日別」は「豊が支配する國の東の分国」という意味を持つ。「筑紫嶋の豊國」は「豊」が支配する西の本國の

分国だったのである。では、「筑紫嶋」の西の「豊」の本國はどこに存在したのであろうか。幸い手がかりがある。日本書紀・仲哀紀である。

筑紫嶋「豊國」の本國が彦島に存在した。

日本書紀・仲哀紀を見てみよう。仲哀紀に「穴門豊浦宮」という宮の記事がある。

秋七月五日、皇后、豊浦津に泊りたまふ。是の日に、皇后、如意珠を海中に得たまふ。
九月、宮室を穴門に興てて居します。これを穴門豊浦宮謂す。 (仲哀紀)

まず、「穴門」とはどこを指すか。これは明確である。同じ仲哀紀に次の記述がある。

又、筑紫の伊都県主の祖五十迹手(いとて)、天皇の行す(いでます)を聞りて、五百枝の賢木を抜じ取りて、船の舳艫(ともへ)に立てて、上枝には八尺瓊(やさかに)を掛け、中枝には白銅鏡を掛け、下枝には十握剣を掛けて、穴門の引嶋に参迎へて献る。 (仲哀紀)

ここでは、明確に「穴門の引嶋」と書いている。「引嶋」とは「彦島」である。「穴門の引嶋」とは「穴門がある引嶋」「穴門で名高い引嶋」と云った意味であろう。では、「穴門」とは何か。これは彦島の小戸(瀬戸)のことである。この瀬戸はまるで穴のような細長い瀬戸である。

そうすると、仲哀天皇がいた「穴門豊浦宮」とは「彦島の瀬戸の豊浦にある宮」ということになる。宮の名前が仲哀宮の所在地を示している。

通常、「豊浦宮」は山口県豊浦郡(日本文学大系日本書紀上頭注)とされるが、仲哀紀は「引嶋」と明記している。「引嶋」とは彦島である。従って、仲哀の「豊浦宮」は彦島に存在した。彦島には仲哀との深いつながりが今に伝わっている。彦島の八幡宮は仲哀を祀っている。そして、八幡宮には仲哀天皇御駐蹕聖蹟の碑がある。これらは彦島に於ける仲哀天皇の足跡を物語る。



仲哀天皇を祀る
彦島八幡宮



では、「豊浦」の「豊」とは何か。「豊」とは仲哀の時代まで下ると、もはや、単なる地名にすぎなくなっているが、古代は「豊」とは「王」の名前であった。仲哀の宮があった「豊浦」とは「豊の國の港」という意味である。ここに「筑紫嶋の豊の國」の本國があった。彦島には女王「豊」が支配する古代國があった。仲哀の宮はかつての「豊の國」の「浦(湊)」にあった。故に「豊・浦・宮」という名前と呼ばれていたのである。古代彦島に存在した弥生国家「豊」が「筑紫嶋」の「豊日別」の本國である。「豊」とは彦島の本國を治め、また「筑紫嶋」の分國を治めていた女王の名前であった。

伊豫と豊の二つの名前を持つ女王の島

古代「豊國」は二つ存在した。本國は彦島に存在、分國は彦島の東方に位置する「筑紫嶋」に存在した。古代「筑紫嶋」とは「九州」をさすのではない。あるいは「福岡県」をさすのでもない。「筑紫嶋」とは彦島の東の方角に存在した小さな嶋である。彦島の東方に位置するのは門司である。古代「筑紫嶋」とは今はもはや嶋ではない。「筑紫嶋」とは門司区に存在する小さな半島、古城山である。

彦島に存在した仲哀の宮「豊・浦・宮」の「豊」が「伊豫二名嶋」の女王のもう一つの名前である。何故、ただ「伊豫嶋」と言わなかったのか。これで名前としては立派ではないか。何故、「伊豫・二名嶋」なのか。「二名」つまり、「ふたつの名前」とは何を意味するのか？

女王「伊豫」にはもう一つの名前があるよ。それは「豊」だよ。

と、云ってるのである。これが「二名」の意味である。「伊豫之二名嶋」は「伊豫(いよ)」と呼ばれた女王が支配した嶋だった。しかし、また、この女王は「豊(とよ)」とも呼ばれていた。「伊豫」と呼ばれ、また、「豊」とも呼ばれ、この二つの名前と呼ばれた女王が支配した嶋が「伊豫二名島」だったのである。

ここで、私たちは有名な記述を思い浮かべる。「魏志倭人伝」において「卑弥呼」の後を継いだと伝えられる「甕与(いよ)」である。彼女は「台与(とよ)」とも書かれている。「甕与」は「伊豫」、「台与」は「豊」である。

古代彦島には「伊豫(いよ)」と呼ばれ、また、「豊(とよ)」とも呼ばれた女王が存在した。その若き女王が卑弥呼のあとを継ぎ、邪馬台国連邦内の争乱をおさめる国王として迎えられた。故に女王は「甕与」と呼ばれ、そし

て、また、「台与」とも表記されたのである。

伊豫二名嶋は彦島老町

「伊豫二名嶋」とはどこか。この特定は、古事記の簡単な記述だけでできるわけではない。この不思議な名前を持つ嶋を特定するまで、「神武東征」を書き上げ、全体像を描き、何度も「州生み」に戻って整合するかどうか検証を重ねた。神武東征行路に当たる「筑紫」が特定できなければ、國生み「伊豫二名嶋」「筑紫嶋」も特定できない。全ては相関関係の中にある。

当初は「伊豫二名嶋」とは彦嶋全体を想定していたが、「州生み」は弥生国家である。その規模は、例えば「大阪府大阪市北区二丁目五番」という住所で云えば、「五番」に当たるぐらいなものであろう。彦嶋全体であるわけがない。では、彦島の中のどの島か。

「伊豫二名嶋」とは面が四つある四角形の島だった。彦島は現在一つの嶋であるが、航空写真で見るといくつかの嶋影が見える。これらの嶋の一つが古代「伊豫」「豊」と呼ばれた女王の嶋である。どの嶋か、形状がほぼ四角と見える島でなければならない。航空写真で彦島南部を探したが、適当な島影はない。

「橘の嶋」がヒント

しかし、「伊豫二名嶋」を特定できるヒントが神功皇后の歌にあった。神功の歌が「伊豫風土記」に残されている。神功はその歌の中で、「橘の島」という名前の島を歌っている。

神功皇后御歌

橘の島にし居れば河遠み曝さで縫ひし吾が下衣。

此の歌、伊豫の國の風土記の如きは、息長足日女命の御歌なり。

この「伊豫風土記」とは「愛媛県伊豫」の風土記ではない。「國生み」の「伊豫二名嶋」の「伊豫」の風土記である。神功は「國生み」の伊豫の「橘の嶋」に居た。歌は、「伊豫の橘の嶋に居るので川が遠い。だから、布を水にさらさないで衣を縫ってしまったことよ」と、いった意味である。

「伊豫」には「橘の嶋」と呼ばれた島があった。「伊豫」を見つける為に、この「橘の島」を探してみよう。この嶋がどの嶋か解明できれば、そこが「伊豫」である。

この島の名前がヒントとなった。「橘」である。「橘」は、通常の意味では、木の名前である。そうすると、「橘の嶋」とは「橘の木がたくさん生えている島」と考えることもできる。しかし、ここでは「橘」とは樹木の名前ではない。橘とは「立ち鼻」である。「橘の嶋」とは「人の鼻の形をした嶋」を意味する。古代「伊豫」には人間の鼻の形をした嶋が存在した。むろん、現在は単独の嶋ではないかもしれない。しかし、超古代は嶋だった故に「橘の嶋」と呼ばれてきた。

では「橘の嶋」とは彦島の中のどの嶋を云ったのか。ここまで来ると簡単だった。航空写真で人の鼻に見える島影を探せばいいのである。「橘の嶋」とは、彦島老の山公園である。老の山公園はまさしく人の鼻の形をしている。鼻があり、口があり、顎がある。人の横顔である。「橘の嶋」とは彦島老の山公園である。ここが古代「伊豫國」である。

「伊豫國」が存在した「伊豫二名嶋」は四角い嶋である。老の山公園は人の鼻に似ているが、四角い嶋ではない。では、どの嶋か。「橘の嶋」と呼ばれた老の山公園の近くに四角い嶋があるか。老の山公園のすぐ隣、顎に当たる彦島・老町、海士郷町がかつては嶋だったように見える。

航空写真を拡大してみよう。彦島老町はまさしく四角形である。その四辺には人が住むことができる平地がある。「身一つにして面四つ有り。面毎に名有り。」と記した古事記にピッタリである。彦島老町・海士郷町が私たちが尋ね求めた「伊豫二名嶋」である。



伊豫國・土佐國・讃岐國・粟國は彦島老町に存在した

彦島海士郷町、老町一丁目は「小戸山」と呼ばれる山を中心とした四角形の土地である。超古代、隣の古い山公園との間は海であったと思われる。やがて州が形成され、伊邪那岐命、伊邪那美命の建国物語の時代には陸続きとなっていたのかもしれない。伊邪那岐命、伊邪那美命はこの小さな島に弥生国家を四つ造った。

伊豫國……………愛比売(えひめ)
讃岐國……………飯依比古(いひよりひこ)
粟國……………大宜都比売(おほげつひめ)
土佐國……………建依別(たけよりわけ)

では、これらの国々はどのような配置だったのか。まず「粟國」と表記される國は本来は「粟(あわ)」ではなく「泡(あわ)」だったのであろう。「粟(あわ)」は「阿波(あわ)」とも表記されるが、「泡(あわ)」が原義であろう。彦島瀬戸は流れが速い。水門(すいもん)が出来るまでは、流れは直角に曲がり、岸にぶつかって、泡と飛び散っていたと思われる。

土井ヶ浜遺跡(下関市豊北町大字神田上)

山口県下関市豊北町の美しい砂丘土井ヶ浜に弥生時代人が300体以上埋葬されていた。ここにも弥生国家が存在したことを物語っている。「州生み」の小国家群もこの土井ヶ浜遺跡と同じように海に面する古代弥生集落だったと思われる。当時の新聞記事がある。

日本人のルーツを探る

土井ヶ浜は豊北町大字神田上にある美しい海岸砂丘である。合併前は神玉村であった。東からこの海岸へ伸びる緩やかな丘陵があり、あまり高くない砂丘を形成している。およそ、2100年ほど前の弥生時代前期中頃から、弥生人たちはこの小高い砂丘上に墓地を作り始めた。この付近から骨が出ることは早くから知られていたようで、古い記録としては、昭和6年に水車小屋を作ろうとして石を起こしたところ、中から人骨が出土したという記録が残っている。発掘通調査は昭和28年から同32年まで九州大学医学部の金丈夫博士らによって行われた結果、合計207体の人骨が発掘され、土井ヶ浜遺跡と命名された。その大部分は弥生人骨であることがわかったが、これほど保存状態が良く、しかも多数の弥生人骨が出土したのは日本で初めてのことであった。この発掘調査と人骨の研究は、弥生時代の埋葬と形質人類学の研究に大きな影響を与えた。昭和37年には遺跡の重要性が認められ、国の史跡に指定された。土井ヶ浜遺跡は人類学・考古学の研究史に残る貴重な遺跡であるが、特に弥生時代人骨は、金博士の日本人種論に関する「渡来・混血説」の具体的な資料となったのである。平成9年の16次調査までに300体以上の弥生時代人骨が出土しており、日本人のルーツを探る研究では欠かせることのできない資料として活用されている。(松下孝幸)

土井ヶ浜で発掘された弥生人骨。みな同じ方向に向いて埋葬されていたという。





逸文風土記の記録

彦島老町は超古代は一つの嶋だった。ここに住む人々の記憶には嶋として残っていた。この嶋の中心的存在は「伊豫」と呼ばれた女王だった。彼女は、また、「豊」とも呼ばれていた。「伊豫」「豊」という名前はつい最近まで女性の名前として広く使われていた。この女王の二つの名前に因んで「伊豫之二名嶋」と呼ばれた彦島老町には「伊豫國(豊國)」「土左國」「讃岐國」「粟國」という弥生国家が存在した。

では、これらの古代国家の実在を証明する史料は存在するのであろうか。万葉集・記紀・風土記に登場する「伊豫」「土左」「讃岐」「阿波(粟)」は彦島のこれらの古代国家のことである。現在の四国の阿波、讃岐、伊予、土佐をさすのではない。幸い風土記逸文が存在する。「伊豫風土記」「土左風土記」「阿波風土記」「讃岐風土記」逸文に残された古代国家の姿を読んでいくことにしよう。

土左國風土記

「伊豫二名嶋」とは彦島老町である。この小さな嶋に「粟」「土左」「讃岐」「伊豫(豊)」の弥生国家(弥生集落)が存在した。「土左風土記」とはこの伊豫二名嶋の古代「土左國」の風土記である。

土左國・玉嶋

土左の國の風土記に曰く、吾川の郡。玉嶋。或る説に曰へらく、神功皇后、國巡りましし時、御船泊てき。皇后、嶋に下りて磯際に休息ひまし、一つの白い石を得たまひき。圓きこと鶏卵の如し。皇后、御掌に安きたまふに、光明四もに出でき。皇后、大く喜びて左右に詔りたまひしく、「是は海神の賜へる白真珠なり」とのたまひき。故、嶋の名と為す。

神功皇后が「土左」で「白真珠」を得たという説話である。この記述では「土左」は通常の「土佐・高知」だと理解されている。ところが同じ説話が日本書紀第八巻・仲哀天皇にある。

仲哀二年秋七月五日に、皇后、豊浦津に泊りたまふ。是の日に、皇后、如意珠を海中に得たまふ。
九月、宮室を穴門に興てて居します。これを穴門豊浦宮謂す。(仲哀紀)

「土左風土記」と「穴門豊浦津」の説話はどちらも神功皇后の説話である。内容も同じで、「白真珠」或いは「如意珠」を拾ったという説話である。ところが地名は異なって表記されている。「仲哀の豊浦」は「穴門(彦島)」で、風土記では「土左」である。この「土左」を高知県だと読むと全く異なる説話となるが、風土記「土左國」は高知県土佐ではない。「伊予二名嶋」の「土左國」である。つまり彦島の「土左國」である。

「伊予二名嶋」が彦島・老町であるという観点から、風土記「土左國」と仲哀・豊浦が同じ場所をさしていることが判明する。風土記・神功皇后と日本書紀・豊浦津は同一場所の説話である。「土左・吾川の玉嶋」と「豊浦」はどちらも古代彦島に存在した。彦島の「土左國」は「豊國」とも云われたのである。

ところで、仲哀の穴門豊浦宮とは彦島小戸のどこに存在したのであろうか。「浦の宮」と云う名前から判断すると彦島瀬戸のどこかの入り江に存在した宮であろう。老町で古代は入り江だったと思われる場所にお宮があるか。最もふさわしいのは貴布祢神社である。ここが仲哀の穴門豊浦宮だったのではないだろうか。

土左高加茂大社

土左の國の風土記に曰はく、土左の郡。郡家の西に去ること四里に土左の高加茂の大社あり。其の神の御名を一言主尊と為す。其のみ祖は詳かならず。一説に曰へらく、大穴六道尊のみ子、味鋌高彦根尊なりといへり。

朝倉神社

土左の國の風土記に曰はく、土左の郡。朝倉の郷あり。郷の中に社あり。神のみ名は天津羽羽の神なり。天石帆別の神、天石門別の神のみ子なり。

神河

土左の國の風土記に云はく、神河。三輪川と訓む。源は北の山の中より出でて、伊豫の國に届る。水清し。故、大神の為に酒醸むに、此の河の水を用いる。故、河の名と為す。

風土記のこれらの記事は「伊予二名嶋(彦島老町)」の「土左國」の記事である。「大八島」の中心に位置した彦島の「土左」の風土記には古事記、日本書紀が載せない古代世界が描かれている。

(1) 一言主尊は雄略天皇の説話に登場する。その説話ではこの神が何者かはわからない。しかし、風土記では「大穴六道尊」の子ども、大国主命の子どもであると言う。であれば雄略天皇が葛城山でこの神に会った時

「恐し、我が大神、宇都志意美有らむとは覺らざりき。」と白して、大御刀弓矢を始めて、百官の人等の服せる衣服を脱がしめて、拝みて献りたまひき。(古事記 雄略)

と、最大限に敬ったのも当然であろう。

(2) 朝倉の社の神は天津羽羽と云う。この神の名は神武東征説話で登場する。この神は「手力男神」と共に「天の岩戸」を開けた神である。「天の岩戸」とは「土左國」の隣、「高天原(彦島・橋)」に存在した。天照大御神が「天の岩戸」に隠れた時、石の扉を開けたのが「彦島・土左」に住んでいた「天石門別」だったと云う。その神の子が朝倉神社に祀られている天津羽羽である。

(3) 神河を三輪(みわ)川と読む。三輪川とは本来「神(みわ)河」の意であると言う。その河は「土左」の北の山に源がある。この山とは「小戸山」ということになろう。河は「伊豫」の國まで流れている。この解説は彦島・「伊予二名嶋」における「伊豫」と「土左」の配置で合理的となる。「大神」の為に作る酒はこの河の水を使ったと云う。「大神」とは天照大神であろう。天照大御神は隣の「橋の高天原」に住んでいた。天照大神のための酒を造る水がこの河の水だったため、「神河(みわがわ)」と呼んだと云う。「三輪」の語源が初めて明らかになる。奈良の「三輪山」の語源も「神河」と同じであろう。「三輪」とは「神」の意である。この河の名前が雄略記に登場する。

亦一時、天皇遊び行でまして、美和河(みわか河)に到りましし時、河の辺に衣洗へる童女有りき。其の容姿甚麗しかりき。天皇其の童女に問ひたまひしく、「汝は誰が子ぞ。」ととひたまへば、答えて詔らしめたまひしく、「己が名は引田部の赤猪子と謂ふぞ。」とまをしき。

雄略天皇のこの説話舞台は彦島・「土左の神河(みわかわ)」である。

伊豫國風土記

「伊豫國」の風土記も存在する。この「伊豫國」も「彦島・伊豫」である。

温泉

伊豫の國の風土記に曰はく、湯の郡。大穴持命、見て悔い恥じて、宿奈毗古那命を活かしまく欲して、大分の速見の湯を、下樋より持ち度り来て、宿奈毗古那命を漬し浴ししかば、暫が間に活起りまして、居然しく詠して、「眞暫、寝ねつるかも」と曰りたまひて、踐み健びまし跡処、今も湯の中の石の上にあり。凡て、湯の貴く奇しきことは、神世の時のみにはあらず、今の世に疹痾(やまひ)に染める萬生(ひとびと)、病を除やし、身を存つ要薬と為せり。……

天山

伊予の國の風土記に曰わく、伊与の郡。郡家より東北のかたに天山(あめやま)あり。天山と名づくる由(ゆえ)は、倭(やまと)に天加俱山(あまのかぐやま)あり。天より天降(あも)りし時、二つに分かれて片端(かたはし)は倭の國に天降(あまくだ)り、片端は此の土(くに)に天降りき。因りて天山と謂う。本(ことのもと)なり。

神功皇后御歌

橘の島にし居れば河遠み曝さで縫ひし吾が下衣。此の歌、伊豫の國の風土記の如きは、息長足日女命の御歌なり。

齐明天皇御歌

伊豫の國の風土記には、後の岡本の天皇の御歌に曰はく、みぎたづに泊てて見れば。云々



(1) 温泉

古代伊豫國にも温泉があったことを記している。記紀で「伊豫の湯」と呼ばれた温泉は古代伊豫、彦島の温泉である。温泉が出なくなった原因は、「時に伊豫温泉没れて出でず」と日本書紀に記録が残る天武の時代の北九州の大地震であろう。

(2) 天山

「伊予の郡。郡家より東北のかたに天山(あめやま)あり」と書かれた山は容易に判別できる。「天山(あめやま)」とは現在「小戸山」と呼ばれている山である。この山は「天の香具山」の本(ことのもと)とも云う。「天の香具山」は持統天皇が歌って有名であるが、この山が「天(あま)」に存在するのではないにも関わらず、「天の香具山」と呼ばれる理由が書かれている。

(3) 神功皇后御歌

同じ歌が万葉集巻7・1315にある。こちらには作歌者名はないが、「伊予風土記」では「神功皇后」の歌と明らかにされている。歌は、『橘の島にいますので、河が遠い。河の水にさらさないで下着を縫ってしまったよ』という意でしょう。

「伊予風土記」に神功皇后が登場する。神功の歌に「橘の島」が詠われている。「伊予」に神功皇后が現れ「伊予」に「橘の嶋」が存在する。これは一体どうしたことか。通常の「伊豫は愛媛」という解釈では「伊豫」「橘の嶋」「神功皇后」は結びつかない。相関関係が見えない。ところが、私たちの認識に従って、「伊豫は彦島老町」「橘の島は彦島老の山」「神功皇后の宮は彦島老の山」と考えると三者は簡単に結びつく。その舞台は凡て彦島である。

「橘の島」の弥生集落はかつて「高天原」と呼ばれた。以降、ここには天皇家の宮が存在した。故に神功皇后もここに住み、ここで詠ったのである。

(4) 斉明天皇御歌

萬葉8番歌 熟田津に 船乗せむと 月待てば 潮もかなひぬ 今は漕ぎ出でな

有名なこの歌に後書きがある。

伊予の熟田津の石湯の行宮に泊つ。天皇、昔日より猶し存れる物を御覧し、当時忽感愛の情を起す。所以に歌詠を製りて哀傷したまふといへり

後書は「伊予の熟田津」と書く。この「伊予の熟田津」がどこか古来難問である。愛媛県伊予には「熟田津」の地名はないという理由もあるが、愛媛伊豫ではこの歌はふさわしくない。「潮もかなひぬ」は、通常「潮の干満」と理解されるが、「潮の干満」は、格別、「適う」「適わない」というものではない。。日本国中のどんな港にも潮の干満はあるのであるから、干潮でも満潮でも予め備えておけば船出はいつでも適う。特に「潮もかなひぬ」と詠う謂われはない。

この風土記ほど貴重な情報は他にない。「伊豫熟田津」とは彦島・「伊豫」の湊である。こうして初めて「潮もかなひぬ」の語句が生きてくる。関門海峡の潮流は古来「難波」と恐れられた潮の流れである。この海峡は昼夜四回、響灘と周防灘の水位の変化によって「西流」と「東流」に激しく潮の流れが変わる。その影響で彦島小戸もおよそ11ノットの速さで潮が流れた。「潮が適う」とは船出に都合のよい潮に変化したと主張しているのである。この歌が白村江への出陣の歌と解釈されるが、その真偽はさておき、歌はこの難波の海を的確に歌っている。

この歌は「額田王の歌」となっている。ところが傍註者は奇妙なことを書く。

後岡本宮に天の下知らしめしし天皇の七年辛酉の春正月丁酉の朔の壬寅、御船(みふね)西に征(ゆ)きて始めて海路(うみつみち)に就(つ)く。庚戌に、御船、伊予の熟田津(にきたつ)の石湯(いわゆ)の行宮(かりみや)に泊つ。天皇、昔日より猶ほし存れる物を御覧し、当時忽感受の情を起す。所以に歌詠を製りて哀傷したまふといへり。すなわちこの歌は天皇の御製そ。ただし、額田王の歌は別に四首あり。

傍註者は作歌者は「後岡本宮に天の下知らしめしし天皇」であるという。額田王の歌は別に四首あると書く。傍註者はその四首の歌を知っているからこのように書いたと思われる。この別にある歌も「熟田津」の歌だと傍註者はいう。この作歌者はだれか。額田王の立場では船出の命令を出すことはできないであろう。故、天皇が作歌者であろうか。

万葉歌 山部赤人の伊予の温泉

山部宿禰赤人、伊予の温泉に至りて作る歌一首 322

皇祖神の 神の命の 敷きいます 國のことごと 湯はしも さはにあれども 島山の宜しき
國と こそしかも 伊予の高嶺の 射狭庭の 丘に立たして 歌思ひ 辞思はししみ 湯の
上の 木群れを見れば 臣の木も生ひ継ぎにけり 鳴く鳥の 声も変わらず遠き代に 神さ
びゆかむ 行幸処

反歌

もしきの大宮人の 熟田津に船乗りけむ 年の知らなく

彦島の「伊豫熟田津」の歌からすでに60年以上経過して、赤人は彦島「伊予」を訪れ、そこで此の歌を詠んだ。赤人の歌から再度、「伊予」を検証してみよう。題詞にある「伊予の温泉」とは道後温泉ではない。「伊豫の國の風土記」に曰はく、湯の郡。」と書かれた「彦島伊豫」の温泉である。赤人が歌った「皇祖神」とはむろん天皇家の始祖神をいう。「伊予」を「皇祖神が統治する国」と詠っている。皇祖神とは天照大神である。歌中に「射狭庭」とある。ここから想起するのは「イザナギ・イザナミ」である。この二人の出身地が「射狭」だったと考えられる。

一方、愛媛県伊予は天皇家の聖地ではない。赤人は「伊予」を「島山の宜しき國」と歌っている。もし、あなたが愛媛県・伊予を訪れた時、その地を「島山」だと見ることができるでしょうか。とても「島山」とは見えないでしょう。「島山」とは海上に山が隆起してできた島である。その点、古代「伊豫二名嶋」と云われた彦島老町は「小戸山」を中心とした島山である。

赤人は彦島の古代伊豫國・「熟田津」を訪れ、万葉8番歌を思いだしてこの歌を詠んだ。赤人の歌舞台は彦島の古代伊豫である。「熟田津」とは彦島老町の瀬戸に存在した港だった。

また、赤人は反歌で熟田津で船に乗りこむのは「大宮人」と歌っている。これは戦闘のための乗船とはいえない。軍人が乗船していざ出陣という情景ではない。万葉8番歌は662年白村江への出陣の歌と考える研究者がいる。しかし古代極東アジアにおける最大の戦、唐・新羅軍事同盟と日本・百済の軍事同盟との祖国存亡をかけた決戦に出発する日本軍総指揮者が詠った歌とするには緊張感に欠ける。8番歌の「後書き」は「石湯」に泊まったと書いている。

温泉に入ってゆっくりした。これが世界最強の軍事国家、唐・新羅が待ち受ける白村江へ出陣する日本軍司令官の姿とはいえない。赤人は「熟田津に船乗せむ」が白村江出陣の歌という認識を持っていない。万葉8番歌は白村江とは全く関係ない歌であろう。

阿波國風土記

奈佐浦

阿波の國の風土記に云はく、奈佐の浦。奈佐と云ふ由は、其の浦の波の音、止む時なし。依りて奈佐と云ふ。海部は波を奈と云ふ。

勝間井

阿波の國の風土記に云はく、勝間井の冷水。此所より出づ。勝間井と名づくる所以は、昔、倭建の天皇命、乃ち、大御櫛箭を忘れたまひしに依りて、勝間という。粟人は、櫛箭を勝間と云ふなり。井を穿りき。故、名と為す。

天皇の称号

阿波國風土記ニモ大倭志紀彌豆垣宮大八島國所知天皇朝廷、或云難波高津宮大八島國所知天皇、或云檜前伊富利野乃宮大八島國所知天皇

アマノモト山

阿波國ノ風土記ノゴトクハ、ソラヨリフリクダリタル山ノオホキナルハ、阿波國ニフリクダリタルヲ、アマノモト山ト云、ソノ山ノクダケテ、大和國ニフリツキタルヲ、アマニカグ山トイフトナン申。

中湖

中湖(なかのみなど)トイフハ、牟夜戸(むやのと)興奥湖(おくとみなど)中ニ在ルガ故、中湖(なかのみなど)ヲ為名。見阿波國風土記。

(1) 奈佐浦は波の音が止むときがないと云う。彦島小戸は直角に曲がる。狭い海峡を11ノットの速度で海流が流れるわけであるから、波がぶつかって泡となって砕ける。阿波國とは言い得て妙であろう。この入り江では波の音が止まなかったのも当然である。阿波＝泡、波の音が止むときがない「奈佐浦」。これらは彦島小戸の情景である。

海部は波を「奈」と云った。だが、「佐」についての説明はない。「奈」が「なみ」なら「佐」は「さわぐ」ではないだろうか。「奈佐」は「なみがさわぐ」という意となる。「さわぐ」の漢字は「騒ぐ」である。「潮騒」も同じ用法であるが、「波がさわぐ」とは波の音を表している。「さわぐ」という波の擬音語に「馬」は相応しくない。「漢字」は大陸文化だから仕方ないところであろう。

「奈」が「波」であることを基にさらに考えてみよう。では「奈良」はどんな意味となるか。「奈」と「良」という組み合わせであるから、「波が良い」という意味となる。「奈良(波が穏やかで良い)」も本来は「海部」の言葉であろう。現在の「奈良市」は何故、「奈良」と云う名前なのか。土地の名前として不思議を感じるのはこの為であろう。「奈良」を「地面をならす」という意味でとらえることができる。だが、この意味も「奈良(平らな波)」が基となったと考えられる。

(2) 倭建が櫛を忘れたのが「勝間」で、「勝間」は「彦島・阿波」だと伝わる。倭建の妻、弟橘比賣は「橘」の出身である。「橘」とは彦島老の山である。倭建は妻の出身地である彦島を訪れていた。そして、「彦島・阿波」の冷水を飲みに行ったが、そこで櫛を忘れた。その故事に因んで井戸の名前を「勝間井」というと伝えた。妻の弟橘比賣は関門海峡で倭建の船が嵐に遭い危うく沈みかけた時、身を投げて「海峡の神」に倭建の救命を願った。彦島・関門海峡が倭建説話の舞台である。



(3) 阿波の山・アマノモトヤマは倭の天の香具山の本の山だと云る。「アマノモトヤマ」は「本山」とであると伝えられているが、仏教界で云う「本山」も同じ用法であろう。本山は阿波國に存在すると阿波風土記に紹介されているが、この山は「伊豫國風土記」に「天山」と紹介されている山である。どちらも彦島の「小戸山」である。

(4) 天皇の称号は「宮の名前」と「大八島國を所知(しろしめし)天皇」という尊称で構成されている。古事記の称号は「天の下治らしめしき」である。風土記では、天皇は「大八島」と統治範囲を具体的にしている。「天の下」も「大八洲」も同じことなのであるが、「大八島」とは「國生み」の「大八洲」で、北九州の大八島である。崇神天皇、仁徳天皇、宣化天皇は北九州の「大八島」を統治する北九州の天皇と云う意となる。何故、阿波國風土記にこれらの天皇が記録されているのか。阿波國と縁が深かった故である。仁徳天皇と彦島の係わりについては第四章で述べるが、宣化天皇は「意祁天皇の御子、橘の中比賣を娶して、生ませる御子、石比賣命(古事記)」と述べるように、その妻が「橘(彦島老町)」の出身だったから、阿波國風土記に紹介されたのであろう。

(5) 中湖とは「なかのみなと」と読む。「中の水門(港)」と同じ意味である。「湖」を「みなと」と読むのは不審だと後書きしているが、「湖」を「みなと」と訓むのが正しい。この認識は格別難しいものではない。彦島の瀬戸は「上」「中」「下」の三つに分かれる。西の港の名を「牟夜戸(むやのと)」と呼んでいる。奥(東)の港はそのまま「興奥湖」である。そして、「中湖」は中間の港である。この港は阿波國の港である。阿波國とは彦島の古代阿波國である。

これらの阿波國の風土記も彦島・阿波國の風土記である。「粟」とも「阿波」とも云われているが、彦島に存在した古代阿波國である。

讃岐國風土記

阿波島

讃岐の國。屋島。北に去ること百歩ばかりに島あり。名を阿波島と曰うト云ヘリ。

この讃岐國も彦島・讃岐である。屋島が記録されているがこの屋島は香川県屋島ではない。屋島(阿波島)との距離を見てください。百歩およそ70m程である。70mが7kmもあれば香川県屋島だとも考えられるがわずか70mでは近すぎる。



万葉歌 柿本人麿が詠う讃岐の狭岑島

人麿に「讃岐の狭岑島」の歌がある。

万葉220番歌 讃岐の狹岑島に、石の中に死れる人を観て、柿本朝臣人麿の作る歌一首
玉藻よし 讃岐の國は 國柄か 見れど飽かぬ神柄か ここだ貴き 天地 日月とともに満りゆか
む 神の御面と 継ぎて来る 中の水門ゆ 船浮けて わが漕ぎ来れば 時つ風 雲居に吹くに
沖見れば とみ波立ち 邊見れば 白波さわく 鯨魚取り 海を恐み 行く船の 梶引き折りて
をちこちの 島は多けど 名くはし 狹岑の島の 荒磯面に いほりて見れば 波の音の 繁き濱
べを 敷栲の 枕になして 荒床に自伏す君が 家知らば 行きても告げむ 妻知らば 来も問
はましを 玉梓の 道だに知らず おぼぼしく 待ちか恋ふらむ 愛しき妻らは

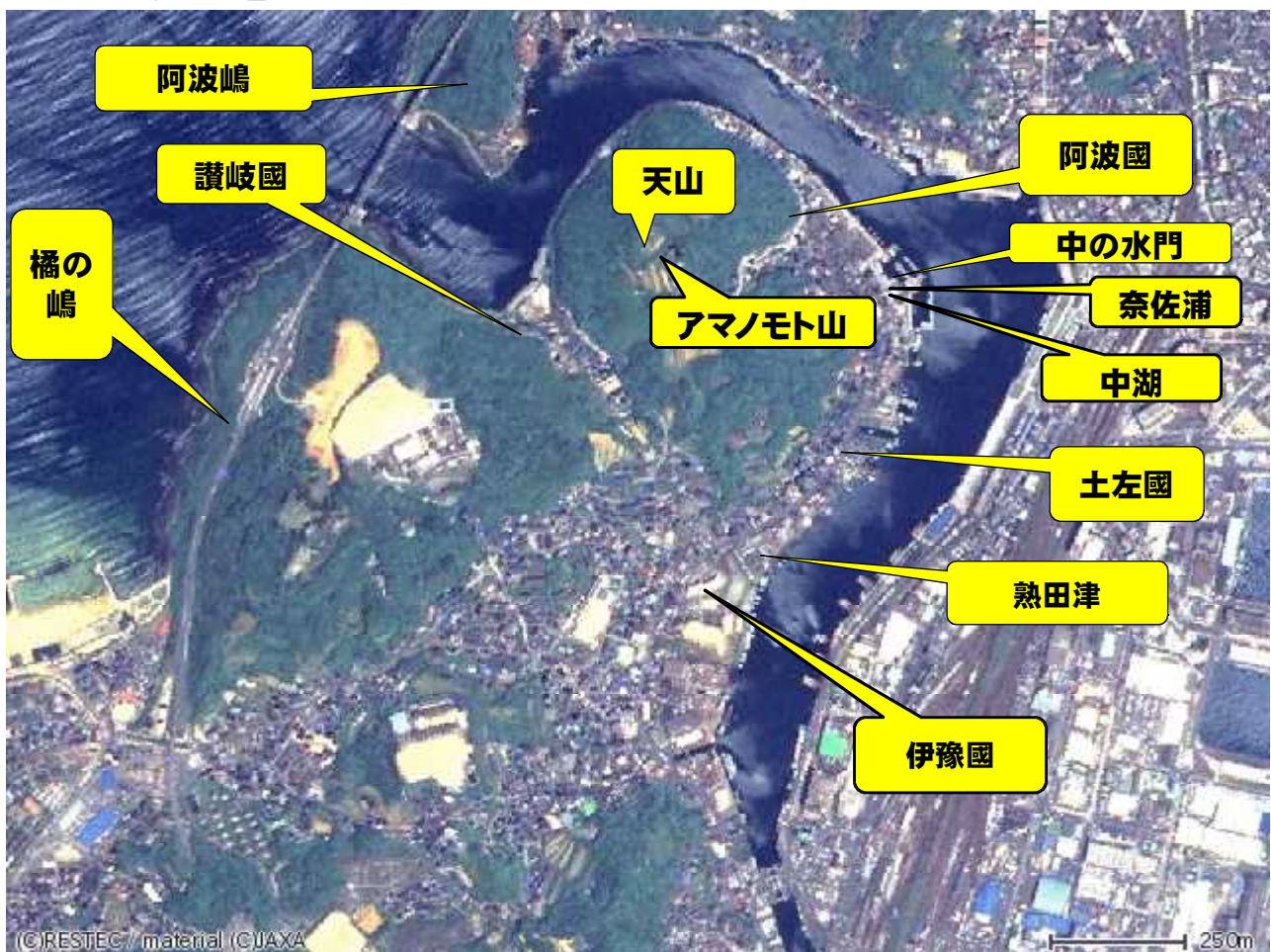
この歌の「讃岐」も彦島に存在した古代讃岐國である。「神柄」とは天皇家の始祖神(天照大神)をいう。歌の「中の水門」という言葉がこの歌の作歌場所を特定する。「上の水門」「中の水門」「下の水門」と三つの水門(港)があるのは彦島小戸である。「中の水門」とは彦島の古代阿波國の港である。

人麿は「阿波國」の水門(港)を経由して「讃岐國の狹岑の島」に漕ぎ来てみれば……と詠った。この歌がいかなる歌なのか、「万葉論」に書いているのでご参照ください。人麿が詠った「讃岐國」とは彦島の古代讃岐である。

上の写真は明治の「上瀬」です。古代讃岐國の小戸の風景です。地理的に考えれば右の嶋が阿波島となるであろう。

以上四つの逸文風土記はイザナギ・イザナミによって彦島「伊豫二名嶋」に建国された「伊豫國」「土佐國」「阿波國」「讃岐國」の風土記である。元明が編纂を命じた風土記より以前に彦島に存在した古代弥生国家の風土記が存在した。これらの風土記は日本書紀・古事記が記さない古代世界を豊かに書きとめていた。

逸文風土記の地名



隠伎之三子嶋

次に国を作った島は「隠伎之三子嶋」である。この島の名前はわかりやすい。その名の通り三つの島が集まっている島であろう。現在の「隠岐」は三つの島であるといえないことはないが、どちらかという二つの島に近い。國生みの名前は「三子」というのであるから同じような嶋が三つ並んでいる嶋であろう。

伊邪那岐命は「伊豫二名島」の次にこの島に渡って國を造った。「伊豫二名島」のすぐ近くの島を探してみよう。「伊豫二名嶋」に特定した彦島老町の対岸に三つの島影が見える。下関市伊崎町である。ここが「隠伎之三子嶋」であろう。この嶋は以降の記紀の記述にはまったく登場しない。歴史の中心から外れた嶋だったのであろう。

